



Title	大阪大学看護学雑誌 19巻1号 退職記念特集
Author(s)	阿曾, 洋子; 荻野, 敏; 三上, 洋 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2013, 19(1), p. 63-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56867
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

思い出を綴って —本学の看護学教育を終えて—



私は、29歳のときに母校で助手として働かないかという恩師の氏家幸子先生からのお誘いで看護教育に足を踏み出しました。これを決意させたのは、保健師学生の実習指導時にいつも感じていた保健師学生の学んでくる教育がなぜこんなにも現場と乖離しているのだろうという疑問でした。看護教育の実態が知りたいというのが転職の動機でした。いざ看護教育の世界に入ると、カリキュラムって何？教育って何？看護技術って何？と、右も左もわからないことばかりでした。保健師時代には中堅として、担当地区の健康教育の企画を起案し、承認を得て実施に移すというようにバリバリと活躍していたことが丸で嘘のような生活でした。その中で、公衆衛生看護学実習の2週間で唯一自分の経歴を活かせる場であったと思います。この時代に、池田保健所の保健師さん、ホームヘルパーさんとチームを組んで、ステージ4で緑膿菌が付着した褥瘡高齢者の家庭訪問を行っていました。褥瘡ケアとしては、緑膿菌耐性のない軟膏を探すために、当時微生物学の教授の東雍先生に薬剤の耐性をみていただきました。その結果を主治医に報告し、往診に同行して肉芽再生しない部分をデブリードメントし、体位変換をヘルパーさんをお願いして約6か月の期間をかけて治癒した時の喜びは、年始の4日間で無残にもステージ3に戻ったショックで帳消しになったことが褥瘡の研究を行うきっかけになりました。

また、氏家先生が看護教員養成課程の受講生たちと清拭について、上腕を拭く速度と冷感との関係、タオルの冷え方などの実験をされていたことから実験研究に興味を持ち、看護技術もまた研究のテーマになりました。

神戸市立看護短期大学に異動し、後年にナイチンゲール記章を受章された高橋令子先生から看護の心を学びました。『患者さんは、空気が動くことでも痛みが増すので、看護師の行動は空気の動きを最小限にすること』、『“病院は患者の生活の場”となるように療養環境を作ることが大切で、病院設計には患者の生活を最もよく知っている看護師も加わる必要がある。』という話が印象的でした。正に眼からウロコが落ちた感じでした。それらが糧になって、今日の私の看護の信念やプライドになっています。さらに、バルンカテーテルに連結するランニングチューブに貯留した尿を円滑に蓄尿バックに導く実験を物理学の教授とも共同で行ったことが実験研究という手法で今に繋がっています。

平成6年度に本保健学科看護学専攻の1期生を迎え入れてから今年度までの19年間は私なりに力を入れて看護学教育に携わってきました。私は、基礎看護技術の授業が最も得意な授業でした。日常生活の援助場面で、学生が難しそうな顔で何かを考えながら取り組んでいる姿を見るのがとても好きでした。学生の困ったような真剣な表情を見ながら、何がわからないのかを想像したり、聞いたりしながら、その技術の根拠が説明できないもどかしさも感じ、文献検索をしたり、研究したりすることが好きでした。なかでも、看護技術で患者を安楽にする補完療法を探し当てることは最も気に入っていました。看護学がアイデンティティを持った学問であるという実感を得ることができたからです。また、褥瘡の予防と早期発見が、誰にでもどこでもできるような簡易な機器の開発も伊部先生をはじめ、阿曽研の院卒生や企業との共同研究で取り組み、現在も継続中です。試作品を作っては実験をして改良を行っていますので、完成までにはまだもう少し時間がいるようですが、楽しみです。

看護学教育を行ってきた通算35年間は、しんどいときや辛いこともありましたが、今になるとすべてが許容されて、楽しい思い出に変わります。このような思い出を作ってくださった恩師や卒業生、院生、同僚等々、そして勤務環境に深謝申し上げます。

今後は、巣立った卒業生・院生が社会で活躍し、本看護学専攻がますます発展することを期待するとともに、心よりお祈り申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野 総合ヘルスプロモーション科学講座
阿 曾 洋 子

ご 略 歴

昭和45年3月 大阪医療技術短期大学部看護科卒業
平成46年3月 兵庫県立厚生専門学校保健学科卒業
平成46年4月 神戸市保健師
昭和53年4月 大阪医療短期大学部助手看護学科
昭和55年9月 佛教大学社会学部社会福祉学科卒業
昭和59年4月 神戸市立看護短期大学部講師を経て助教授
平成4年8月 大阪大学医療技術短期大学部助教授看護学科
平成5年10月 大阪大学助教授医学部保健学科
平成9年4月 大阪大学教授医学部保健学科
平成15年4月 大阪大学教授大学院医学系研究科保健学専攻（～平成25年3月）
平成15年4月 大学評価・学位授与機構学位審査専門委員および審査委員

学 位 平成8年2月 医学博士（大阪大学）

学会活動

日本看護科学学会評議員、日本看護研究学会理事、日本看護学教育学会理事、日本褥瘡学会理事、
日本看護技術学会評議員、日本老年看護学会評議員、日本人間工学会評議員

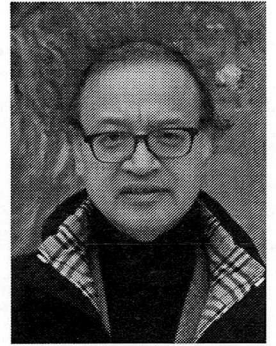
主な著書

1. 阿曾洋子編, 阿曾洋子, 板倉勲子, 大巻悦子, 中村裕美子: 在宅ケアの援助技術, 廣川書店, 1999.12.10
2. 日野原重明, 井村裕夫監修 武田雅俊編集, 武田雅俊, 篠崎和弘, 西川隆, 阿曾洋子他: 看護のための最新医学講座, 中山書店, 2000.12.1
3. 阿曾洋子, 奥宮暁子, 鈴木純恵, 藤原千恵子編著, 久米弥寿子他: 実践へつなぐ看護技術教育, 医歯薬出版株式会社, 2006.9.25
4. 阿曾洋子, 井上智子, 氏家幸子: 基礎看護技術第7版, 医学書院, 2011.2.15

主要学術論文

1. 阿曾洋子, 藤田恵子, 高鳥毛敏雄, 多田羅浩三: 在宅寝たきり老人の自立意欲維持に関連する要因, 厚生の指標, 45(5), 10-15, 1998.5
2. Yoko Aso, Kozo Tatara, Toshio Takatorige, Osamu Ida and Keiko Fujita: The Effect of the Will of the Bedridden Elderly to be Self-Reliant on their Life Prognoses in Japan, Environmental Health and Preventive Medicine, 4(1), 58-62, 1999.4
3. 新田紀枝, 阿曾洋子, 葉山有香他: 化学療法に伴う遷延性嘔気に対する足浴後マッサージによるリラクゼーション効果, 看護研究 37(6), 63-74, 2004.10.15
4. Megumi Katayama, Yoko Aso, Aki Ibe, et al : Relativity of postural change into prone position and effect of bowel intestinal peristalsis activation for elderly people. Health and Behavior Sciences, 9(2), 117-126, 2011
5. Tomoko Tamaru, Yoko Aso, Aki Ibe, et al : The relationship between the nurses' low back load and the height of the bed during patient transfer. 人間工学, 47(5), 217-221, 2011

定年退職に当たって



平成 25 年 3 月 31 日をもって、めでたく(?)定年退職いたします。昭和 48 年 3 月に大阪大学医学部を卒業し、直ちに耳鼻咽喉科に入局したときには、このような形で定年を迎えるとは全く考えてもいませんでした。しかし、定年を迎える今考えると、意味のある職務であったと心から思っています。

平成 7 年 4 月に新設された医学部保健学科に医学部から転任してきました。はじめのうちは一部の講義は石橋の学舎で行っていました。また今の建物も建設中であり、しばらくの間医学部の 10 階に数人の先生方と同居しておりました。そして翌年、看護学専攻のみこの建物に引越し、その後今のような形になりました。

就任した当時はなれないことばかりで心身ともにかなり疲れたことを覚えております。今でもそうですが、専門以外の講義もかなり担当しなければならず、それなりの講義ノートをつくるのに数年はかかったと記憶しています。このようなときに、学生時代からご指導を受けていた故渡辺信一郎先生がおられたことは本当に心強く助かりました。講義を行ってはじめにびっくりしたことは、欠席が少ない(当時の医学部では半分もいればよい方)、講義ノートをとる鉛筆の音が聞こえること(医学部では考えられませんでした)。そのようなことがあると講義をするのも楽しくなります。次に戸惑ったことは、卒業研究指導です。医学部では卒論というものがなく、どのような指導が良いか全く分かりません。どういうわけか 1 年目は 11 名の学生が来てくれました。そのうちの数名は今でも遊びに来てくれます。自分なりにテーマを決め相談しながら行いました。本当に良い経験でした。

このようなことからわかったことは保健学科の学生は予想以上、想像以上に出来が良いということです。数年の経験により、(今も同じですが)私の指導方針は形にはめず自由にのびのびさせることとしました。それだけの能力をここの学生、院生たちは持っています。その能力を信じ、いかにモチベーションをあげていくことが大切であり、そのような経験をさせてもらったことを感謝しています。

CSCD、グローコール、臨床医工学の兼任教員をさせてもらえる幸運も重なり多くの先生、院生、学生と接する機会を得ました。また事務職員の方にもいろいろ教えていただきました。このような経験は医学部にいたならば絶対無かったと思います。自分の人生にとって人として生きていく上で本当に幸運であったと心から思っております。

退職するに当たり一言申しあげておきたいこと。保健学科は本当に素晴らしいところです。学生を一つの枠にはめることなく指導を行うことによりさらに大きな人間が育っていくと思います。教育とは良い研究、論文を書かせることではなく、素晴らしい人を育てていくことです。すべてのことに感謝して!

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野 看護実践開発科学講座
荻 野 敏

ご 略 歴

昭和 48 年 3 月 大阪大学医学部卒業
昭和 48 年 4 月 大阪大学医学部耳鼻咽喉科入局
昭和 51 年 1 月 大阪通信病院耳鼻咽喉科医員
昭和 53 年 10 月 大阪大学医学部耳鼻咽喉科助手
昭和 56 年 6 月 フランス、パリ、ロチルド病院アレルギーセンター留学(昭和 57 年 8 月)
昭和 60 年 4 月 大阪大学医学部耳鼻咽喉科講師
平成 7 年 4 月 大阪大学医学部保健学科教授
平成 16 年 4 月～18 年 3 月 大阪大学評議員、大阪大学医学部保健学科長
平成 15 年 4 月 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻(～平成 25 年 3 月)

学 位 昭和 54 年 11 月 医学博士号取得 (No.4 7 5 9)

学会活動

日本耳鼻咽喉科学会代議員、日本アレルギー学会代議員、日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事、
日本鼻科学会代議員

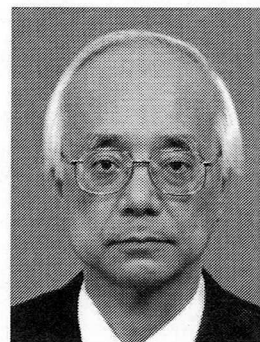
主な著書

1. 荻野 敏:アレルギー性鼻炎・花粉症とは. アレルギー性鼻炎・花粉症の診断と治療(監修:荻野 敏), p7-19, メディカルレビュー社, 大阪, 1997.
2. 荻野 敏 (監修): 自分の病気を正しく理解し『花粉症』と “うまくつきあう方法”. トーア総合企画社, 大阪, 1999.
3. 荻野 敏 (分担) アスピリン過敏症 新しい診断と治療の ABC『アレルギー性鼻炎、改訂第 2 版』(編集:今野昭義), p77-85, 最新医学社, 大阪, 2011.

主要学術論文

1. Ogino S, et al: Nasal allergy in medical students. Rhinology 28:163-168,1990.
2. Ogino S, et al: Use of Tranilast [N-(3,4-dimethoxycinnamoyl) anthranilic acid] in secretory otitis media. Ann Allergy 68:406-412,1992.
3. Ogino S, et: Arachidonic acid metabolites in human nasal polyps. Acta Otolaryngol(Stockh) Suppl 501: 85-87,1993.
4. Ogino S, et al: Comparison of multiple-antigen simultaneous test and CAP systems for diagnosis of nasal allergy. ORL 57:210-213, 1995.
5. Ogino S, et al: Re-treatment with Omalizumab at one year interval for Japanese cedar pollen-induced seasonal allergic rhinitis is effective and well tolerated. Int Arch Allergy Immunol 149:239-245,2009.

看護学研究における保健学倫理委員会の役割について



定年退職するにあたり、保健学専攻に在籍した18年間に何を達成したかと自問すれば内心忸怩たる思いがあるが、就任直後より4年制に改組された学部・大学院の学年進行、矢継ぎ早の大学院修士課程・博士課程の開設など、大学院化にわき目もふらずに懸命に対応したという感が強い。

大学院化により保健学専攻の研究機関としての位置付けが高まるのと同時に、研究の倫理的な側面の整備を厳しく求める時代の流れが高まり、平成15年5月本保健学専攻において大阪大学医学部医学倫理委員会の下に保健学倫理小委員会が発足した。その後、諸般の事情から平成18年10月には保健学倫理小委員会は医学部保健学倫理委員会に改組され現在に至っている。

本倫理委員会は、保健学科に所属する研究者が行う医学研究について、「疫学研究に関する倫理指針（文部科学省・厚生労働省）」及び「臨床研究に関する倫理指針（厚生労働省）」の趣旨に沿った審査を行うことを目的としている。ただし、研究の場や対象が医学部附属病院にある臨床的な研究については、直接に医学部附属病院未来医療センター臨床試験部門に設置された医学部附属病院臨床研究倫理審査委員会に審査を申請することとなっている。

保健学倫理委員会に移行したあと、平成20年度からは審査の迅速化のために、ネット環境を活用して倫理委員が責任査読者を務め2名の専門査読者を保健学専攻教員から選任して行う（1次）審査が導入され、さらに倫理委員会委員による2次審査をネット上で行う方式に移行した。しかし、私が委員長に就任した平成22年度初めに委員の直接審議を必要条件とする厚労省の指針を満たすことが求められたため、委員が一堂に会して開催する倫理委員会において3次審査を経て承認することに変更した。そのため、倫理委員会開催の要件となっている外部委員を3名に増やすことにより、交代出席により外部委員の負担を軽減し、委員会の月1回の定期開催を確保した。

このように看護研究を含む医学的研究の実施に関しては、倫理的配慮がさらに厳しい形で要求されるこの時代に研究計画の倫理審査を適正かつ粛々と行うことが保健学倫理委員会の責務であり、そのためには審査業務の迅速化と効率化が、保健学専攻の研究組織としての活性と研究の質を保証する基盤のひとつであると信じてこの3年間保健学倫理委員会を運営してきた。ちなみに、保健学倫理委員会に移行した平成18年10月から平成24年12月の段階で約247件、私が委員長を務めた最近の3年間で約132件を審査・承認した。この過程で、特筆すべきは平成23年度から倫理委員会の事務所掌が庶務係から研究支援係に移されたことである。これにより格段に倫理申請の手続き事務が効率化され、各委員が審査に専念できることに繋がった。この間の倫理委員会の申請および審査の効率化はこのような事務方のご支援に負うところが大きいことを挙げ、深甚の感謝の意を表す。また、私の運営方針に賛同してご協力とご尽力頂いた保健学倫理委員会委員各位に敬意と感謝を表し、私が大学を去った後も保健学専攻の研究の発展に本委員会が貢献されることを祈念してこのメッセージを閉じる。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野 総合ヘルスプロモーション科学講座
三 上 洋

ご 略 歴

昭和49年3月 奈良県立医科大学卒業

昭和49年4月 淀川キリスト教病院内科（～昭和52年3月）

昭和52年7月 大阪大学医学部附属病院医員（老人科）

昭和56年1月 アメリカ合衆国オハイオ州クリーブランドクリニック研究員（～昭和58年12月）

平成2年3月 大阪大学医学部助教授（老年病医学）

平成7年4月 大阪大学医学部保健学科看護学専攻教授

平成15年4月 大阪大学大学院医学系研究科教授（～平成25年3月31日）

学 位 医学博士（大阪大学 昭和59年5月）

学会活動

日本老年医学会、日本内科学会、日本高血圧学会、日本内分泌学会、日本公衆衛生学会、日本地域看護学会、日本在宅医療学会、日本看護科学学会、日本看護研究学会等

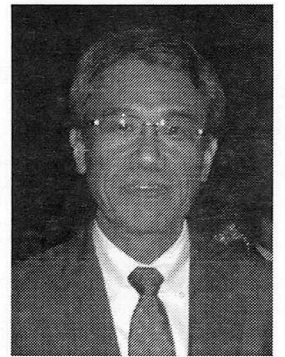
主要著書

1. 三上 洋 疾病に対する医療（1）診断と治療、予防（p.67-89）、呼吸機能の障害と心臓機能の障害（p.134-171）、血管系機能の障害と造血機能の障害（p.172-208）． 松尾ミヨ子、大和谷厚編、
「改訂新版 疾病の成立と回復促進」放送大学教育振興会 東京 2011
2. 三上 洋 「Ⅲ．看護・介護・福祉・リハビリテーション， 5．高齢者のQOL」（p.319-323）
荻原俊男編「老年医学」朝倉書店 東京 2003

主要学術論文

1. Akiyama A, Hanabusa H, Mikami H. Trends associated with Home Care Supporting Clinics (HCSCs) in Japan. Archives of Gerontology and Geriatrics 54 (3): E383- E386, 2012.
2. Arima S, Mikami H. A study of the effects of the tobacco educational program for smoking cessation support in baccalaureate nursing students over 18 months. Journal of Health and Human Ecology 77 (5): 187-197, 2011.
3. Nakashita Y, Nakamura M, Kitamura A, Kiyama M, Ishikawa Y, Mikami H. Relationships of cigarette smoking and alcohol consumption to metabolic syndrome in Japanese men. Journal of Epidemiology 20 (5): 391-397, 2010.
4. Sugiura K, Ito M, Kutsumi M, Mikami H. Gender differences in spousal caregiving in Japan. Journals of Gerontology Series B-Psychological Sciences and Social Sciences 64 (1): 147-156, 2009.
5. Moon JS, Mikami H. Difference in subjective well-being between ethnic Korean and Japanese elderly residents in an urban community in Japan. Geriatrics & Gerontology International 7 (4): 371-379, 2007.

看護薬理学を夢見て



昭和 43 年に入学し、昭和 53 年より教員として勤務してきました大阪大学をこの 3 月末で退職いたしました。保健学科ではその発足以来、看護学専攻の「薬理学」の講義を担当し、また、医療短大時代にも非常勤講師として担当していましたの、阪大の看護教育で、ほぼ四半世紀「薬理」を教えていたことになります。

毎年の講義の冒頭では、学生諸君に薬の用法についての常識を確かめる質問をします。例えば「食間服用とは食事をしている間に服用することである。」「坐薬は座って飲む薬である。」というような問に○か×で答えさせますと、ほとんどの学生は正解しますが、では、「食間に薬を服用する意味は?」、「坐薬で直腸粘膜から薬を吸収させる利点は?」と聞くと答えられません。それをこれから学んで欲しい、丸覚えするのではなく、論理でものごとを考えて欲しいと伝えます。

ところで、医療現場においてヒヤリとしたり、ハットした事例として 2006 年に日本医療評価機構が国内の 250 施設から集めた 182,000 件のうち、最も多いのが「くすりの取り違いや量の間違い」で、これだけで 26%、全体の 4 分の 1 以上を占めます。そして「調剤や製剤」でのミスを加えますと、実に全体の約 3 分の 1、つまり約 55,000 件が薬物の投与に関連する行為が原因となってヒヤリハットが発生しています。また、このようなヒヤリハット事例の当事者の 4 分の 3 以上、76.7%は看護師から報告があったもので、看護師がその業務の中で、多くの薬に関係するヒヤリハット事例に関わっていることが推察されます。

看護職は日常業務の中で実際の薬物投与や服薬の確認を行い、そして何よりもクライアントの一番近くで観察をしています。また、クライアントから薬のことについて直接質問されることも多いでしょう。病棟薬剤師とともに服薬指導に関わることもあります。がん看護や精神看護、慢性疾患看護などの専門看護師の場合には、その専門性の高い業務を行う上で、それぞれの領域で使用される薬物について、より正確な知識が不可欠です。また、看護師が治験のコーディネータとして被験者さんのサイドに立って、新しい薬の臨床開発に関わる機会も増えてきています。そして、看護過程や看護診断、さらにクリニカルパスを考えるとときには、個々の処方の意味するところと、使用される薬物の期待される効果と可能性のある有害作用についての知識が不可欠です。医師や薬剤師と協働して安全で有効な薬物療法を遂行する上において大きな役割を果たす看護職者は薬の効き方と効かせ方をしっかりと理解していただかねばならないと思います。

米国の看護教育で使われている教科書に“Pharmacology and the Nursing Process”があります。この教科書は A4 版で 921 ページの大部であり、著者は RN の Dr. Linda L Lilley と薬学者の Dr. Robert S Aucker であり、Reviewer 22 名の中で RN が 12 名を占めています。治療薬ごとに基礎から臨床、看護診断や看護過程における位置づけはもちろん、さらに看護ケアプランや患者教育のコツまで言及されています。翻って、わが国の教科書を見ると、200 ページ程度で、著者もほとんどが医学科の教員で、医学科で使っている教科書を簡単にしただけの様な感じです。

阪大退職後は、専門学校での看護教育に携わるほか、本学卒業生の推薦で大阪府看護協会の認定看護師教育課程での講義も担当させていただく予定です。看護学の領域に看護薬理学 Nursing Pharmacology が確立することの夢に向かってもう少しがんばろうと思っています。皆様方のご支援、ご指導をよろしくお願いします。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
医療技術科学分野 医用物理工学講座
大 和 谷 厚

ご 略 歴

- 昭和 43 年 3 月 大阪府立豊中高等学校卒業
昭和 49 年 3 月 大阪大学医学部卒業（医師）
昭和 53 年 3 月 大阪大学大学院医学研究科修了（医学博士）
昭和 53 年 4 月 大阪大学医学部助手（第二薬理学講座）
昭和 58 年 10 月 大阪大学助教授（分子生理化学講座）
平成 6 年 4 月 大阪大学教授（医学部保健学科医用物理学講座）
平成 15 年 4 月 大阪大学大学院教授（医学系研究科保健学専攻）（H25 年 3 月退職）
平成 21 年 8 月 放送大学客員教授（現在に至る）
平成 24 年 4 月 あしなが育英会 理事（非常勤）（現在に至る）

阪大での主な役職

- 平成 15 年 6 月 大阪大学学生生活委員会 委員長（平成 21 年 3 月まで）
平成 18 年 4 月 大阪大学総長補佐（平成 20 年 8 月まで）
平成 18 年 4 月 大阪大学セクシャルハラスメント相談室 室長（平成 20 年 8 月まで）
平成 19 年 4 月 大阪大学教育研究評議員（平成 22 年 3 月まで）
平成 19 年 4 月 大阪大学医学部保健学科 学科長（平成 22 年 3 月まで）
平成 22 年 8 月 大阪大学ハラスメント相談室 室長（平成 25 年 3 月末まで）
平成 23 年 8 月 大阪大学総長補佐（平成 25 年 3 月末まで）

主要著書

1. 最新医学大辞典 初版(1987)、第二版(1996)、第三版(2005) 医歯薬出版
2. 医用放射線科学講座 全14巻 1996～1999、医歯薬出版
3. 疾病の成立と回復促進（2011） 放送大学教育振興会
4. 人体の構造と機能（2012） 放送大学教育振興会
5. Structure and functions of the histaminergic neurone system. Handbook of Experimental Pharmacology Vol.97, Histamine and Histamine Antagonists Ed. B.Uvnäs, pp.243-283 (1991) Springer Verlag, Berlin-Heidelberg-New York

主要学術論文

1. T.Ishizuka, T.Murotani, A.Yamatodani Action of modafinil through histaminergic and orexinergic neurons. Sleep Hormones (Ed. Gerald Litwack), Vitamins and Hormones 89:259-278(2012)
2. K.Yamamoto, K.Asano, Y.Ito, N.Matsukawa, S.Kim, A.Yamatodani Involvement of hypothalamic cyclooxygenase-2, interleukin-1 and melanocortin in the development of docetaxel-induced anorexia in rats. Toxicology (2012) Aug 4. [Epub ahead of print]